Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

Efficacy and safety of preoperative DCF therapy for resectable squamous cell carcinoma of the esophagus

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白井, 雄史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032145

主 論 文 の 要約

Efficacy and safety of preoperative DCF therapy

for resectable squamous cell carcinoma of the esophagus

（根治切除可能食道癌に対する術前 DCF 療法の有効性および安全性の検討）

東京女子医科大学消化器外科学教室

（指導：山本雅一　教授）㊞

白井　雄史

東京女子医科大学雑誌　86 巻 2 号　　（平成 28 年 4 月 25日発行）に掲載

【目的】

近年食道癌化学療法において DCF 療法[Docetaxel(DOC) / Cisplatin(CDDP) / 5-fluorouracil(5FU)] 療法が行われているが、食道癌治療ガイドラインでは明記されていない。今回術前 FP(CDDP / 5-FU)療法群と臨床病理学的項目について比較検討を行った。

【対象および方法】

cStage 2 / 3(T4 症例、R 2 切除症例は除く)進行胸部食道癌に対し、当院で 2010 年より術前 DCF 療法を行った 27 症例を対象とし、2000 年～2009 年まで当院で術前 FP 療法を施行した 22 例と比較検討、その安全性と有効性を Retrospective に検討を行った。

【結果】

DCF 群では臨床奏効率 62.9 %、組織学的奏効率 70.4%であった。有害事象は Grade3 以上の好中球低下 22 例（うち発熱性好中球減少 5 例）であった。術後合併症は縫合不全 2 例、腸閉塞 1 例、心肺合併症 3 例、肝障害 1 例であった。FP 群では臨床奏効率は 63.6%、組織学的奏効率 68.2%であった。有害事象では Grade3 以上の好中球低下 5 例、発熱性好中球減少は認めなかった。術後合併症は縫合不全 1 例、

肺合併症 6 例であった。化学療法終了日から手術までの平均日数は、DCF 群 36 日、FP 群 32 日であった。手術時間では DCF 群：396 分、FP 群：352 分、周術期に輸血を要したのは、DCF 群 22 例(81.4%)、FP 群 12 例(54.5%)であった。DCF 群では 27 例中 1 / 2 コース施行は 11 例 / 16 例であり、FP 群では 22 例中 1 / 2 コース施行は 4 / 18 例であった。実際投与量の平均は FP 群では 76.1 ㎎/m^2 であり、レジメンと比較しても 90％以上の投与が可能であった。DCF 群では 54.6 ㎎/m^2 とレジメンと比較し 80％程度となった。1 コースのみとなった症例が DCF 群では 11 例であったが、その中での Grade1b 以上を認めた組織学的奏効率は 63.6％であり、FP 群や DCF 2 コース施行例とも有意な差は認められなかった。

【考察】

DCF 群は FP 群と比較し奏功率に差は認められなかった。有害事象について、Grade3 以上の好中球減少、発熱性好中球減少症が DCF 群で有意に多く認められたが、G-CSF 製剤や抗生剤の予防的使用により回避可能と考えられる。周術期合併症に関して有意な差は認めず、手術までの期間に関しても差は認められなかった。DCF 群で実際の投与量がレジメンと比較し 80％程度となったが、FP 群と奏効率で有意な差は認めていない。容量依存性に効果があると考えると、今後容量を増やすことで更なる治療効果が期待できる。近年、新薬の登場により多岐にわたるレジメンがあるが、化学療法の内容を問わず効果のある症例と全く効果のない症例を経験する。進行食道癌症例において長期生存患者は、化学療法または化学放射線治療が非常に有効であった症例であり、現時点でその指標は不明である。実際に治療し反応を評価しなければわからないのが現状である。

【結論】

DCF 療法は重症な有害事象が生じてはいるものの予防可能と考えられ、厳重な管理のもとに行えば術前化学療法の一つとして許容できるものとして考えられたが、今後さらなる検討が必要である。